



Viet Nam

学校名：船橋市立船橋高等学校

氏名：多胡 香穂里

[担当教科：国語]

- 実践教科等：国語総合
- 時間数：9 時間
- 対象生徒：1 年 E 組（普通科）
- 対象人数：41 人

1 単元名

古典 古文 随筆 「徒然草」 公世の二位のせうとに

2 単元の目標

ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度（国立教育政策研究所が例として示したもの）

- ・『徒然草』の読解を通して日本人が古来より持っている無常観を知り、その考え方が現代の私たちにも通ずるものであることを理解する。【6 つながり尊重する態度】
- ・ベトナムにおける古典教育の現状と、文学と生活とのかわり、文化保全に対する取り組みを知る。日本の古典教育や文学、文化とのかわり方を比較することで、その特徴を理解する。【1 批判的に考える力】
- ・現在学んでいる古典作品を、国際理解教育の視点で捉え直したとき、古典を学習することが文化継承につながりことを知り、積極的に古典を学ぶ意識を醸成する。【7 進んで参加する態度】

3 資質・能力育成に向けた授業づくりの視点（国立教育政策研究所・2014）

- | | |
|-------------------------|--------------------------|
| 1 意味のある問いや課題で学びの文脈を造る | 2 子供の多様な考えを引き出す |
| 3 考えを深めるために対話のある活動を導入する | 4 考えるための教材を見極めて提供する |
| 5 すべ・手立ては活動に埋め込むなど工夫する | 6 子供が学び方を振り返り自覚する機会を提供する |
| 7 互いの考えを認め合い学び合う文化を創る | |

4 単元の指導について

（1）教材観

本教材は鎌倉時代の作であり、平安時代の文法と比較しても読みやすく、随筆作品であることから生徒が理解しやすいものであると考えられる。特に序文は、中学校の古典でも取り上げられているものであり、暗唱できる生徒もいる。兼好法師の述べる無常観や、様々なものに対する批判精神は、日本人が古くからなじみのあるものであり、国際化社会である現代を生きる生徒たちにとっても、重要な考え方である。

今回は、授業実施者が JICA の教師海外研修で得た経験を基に、ベトナムと日本の古典教育の比較を実施する。同じ中国語（漢語・漢字）由来のベトナム語と日本語だが、両者のたどった歴史は大きく異なっている。ベトナム語の歴史と、ベトナムでの古典教育について知ること、現在の日本語と、日本の古典教育の特徴について、生徒の理解を促す。以上のことを踏まえ、「なぜ古典を学ぶのか」という問いを生徒に投げかけ、主体的に古典を学ぶ姿勢を身につけさせることを、本授業の目的とする。

（2）児童生徒観及び指導観

本校は普通科・商業科・体育科の 3 科を有する。今回の授業対象である普通科について言及する。

今年度より学区拡大に伴い、他市からの受験が可能となった。「国際教養コース」では、英語の単位数を増やし、オーストラリアへの語学留学を行うことで、国際社会に活かせるより高度な能力を身につけられる環境を整えている。ALT も 3 名常駐しており、より手厚い英語授業が展開されている。

授業を実施したクラスには、「国際教養コース」の生徒を含まない 41 名が在籍している。主体的に授業に参加し、理解が進まない生徒にも積極的に教え合う雰囲気がある。コミュニケーションを取ることをいとわない生徒が多いため、グループでの活動を多く実施している。古典の文法事項については用言の活用が一通り終了し、助動詞の意味を辞書や文法書で確認しながら読み進められるレベルである。高校卒業後、留学や国際大会への出場を視野に入れている生徒もいるため、授業や LHR において国際理解教育に関する話を年度当初から頻繁に取り入れている。

5 評価規準

観点	関心・意欲・態度	話すこと・聞くこと	読むこと	書くこと	知識・理解
評価規準	・作品が書かれた時代背景を考慮に入れながら、作品を味わうことができる。 ・ベトナムと日本の違いについて関心を持つことができる。 ・ベトナムと日本の比較を通じて、古典を学ぶことについて自分なりの動機を持つことができる。	・作品のテーマや文法事項などについて、グループや全体で説明できる。説明を聞き、理解できる。 ・ベトナムと日本の言語や古典教育の違いについて、グループで話し合うことができる。	・歴史的仮名遣いや古語に注意し、作品の内容を把握できる。 ・ベトナム語で書かれた本を読み、その特徴を捉えることができる。	・板書や授業内容などをノートにまとめられる。 ・作品のテーマや、得た知識を基に自分の考えをまとめられる。 ・古典作品の書写を通じて日本文化を体験することができる。	・作品の書かれた時代に関する基礎的な知識を身につけている。既知事項を基に、文章を読解できる。 ・ベトナムに関する知識を基に、日本語や古典教育の特徴を理解する。
評価方法	全体での発言、グループ内での発言 ノートへの記入内容	全体での発言、グループ内での発言	全体での発言、グループ内での発言 ノートへの記入内容	ノート及びワークシートへの記入内容	ノート及びワークシートへの記入内容 小テストへの取り組み

6 単元の構成

時限	学習のねらい	授業内容
1	・日本の古典作品について知る。	・『徒然草』の作者である兼好法師の紹介を聞き、日本の三大随筆とその文学的意義を理解する。
2 ～ 5	・古典作品を正しく、深く読む知識を身につける。	・「公世の二位のせうとに」の現代語訳と品詞分解を行う。
6	・古典作品の読解を通じて、自国の文化や精神について理解を深める。	・兼好法師が『徒然草』の中で述べた精神が、現代の私たちにも通じるものであることを学ぶ。 ・兼好法師が「高名の木登り」を紹介し、古典の持つ、人間の普遍性を言及する効果について理解する。
7 ・ 8	・日本とベトナムの古典教育を比較することを通して、その特徴と文化保全の大切さを理解する。	・共に漢字文化圏であったが、漢字を残しつつ発展した日本と、文字を持たなかったため古典が存在しないベトナムの違いを把握する。 ・ベトナム少数民族の伝統文化保全のための活動と、支援団体 FIDR の取り組みについて理解を深める。
9	・自文化を体験する。	・古典作品の冒頭を書写する。 (清少納言『枕草子』、鴨長明『方丈記』、兼好法師『徒然草』、

		松尾芭蕉『奥の細道』の4つから、自分で一つ選択)
--	--	--------------------------

7 授業事例の紹介

小単元名【 ベトナムと日本の古典教育を比較して、その特徴を知ろう 】

(1) 指導案

(ア)実施日時 11月22日(水)第6限 及び 11月28日(月)第4限

(イ)実施会場 1年E組教室

(ウ)本時の目標

・日本とベトナムの古典教育を比較することを通して、その特徴と文化保全の大切さを理解する。

(エ)指導のポイント

古典の授業は、とすれば文法解釈(品詞分解)が中心であると、生徒に受け取られる危険性を持っている。私は常々、辞書や文法書を駆使して自ら訳出すること、またそれらが使えない場合でも推測して内容を把握することが大切であると生徒に伝えてきた。その理由の一つは、未知のものに出会ったとき、書物やインターネット等を使って調べ、既知の内容とつなぎ合ったり、周りの人たちと知識を共有し推測しながら理解していくプロセスを体験させたいからである。

そして、今回は別の側面から、日本の古典教育が文化継承の一つの形式であり、生徒が日本の古典を学ぶ動機づけにつなげることを理由として挙げる。日本で当たり前のように使われている日本語や、行われる古典教育は、世界的に見れば当たり前ではなかった。文字を長らく持たなかったベトナムでは、日本のような古典教育を実施できないが、ベトナムの人々にも愛する古典作品が存在していたこと、少数民族の文化を外部の協力を得ながら保全する活動に取り組んでいることを、今回の研修で知ることができた。その活動を現地の写真やインタビュー動画を交えて紹介しながら、生徒が自らの古典に対する姿勢を振り返る機会を作っていた。

(オ)本時の展開

① 11月22日(水) 実施

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
導入	・研修の紹介 を行い、ベトナムの概要に触れる。【4】	・JICA海外教員研修の紹介をし、ベトナムについての知識を確認する。	グループ 全体	・パワーポイントや具体物を用いて、視覚的に捉えやすくする。	・他教科でのベトナムに関する知識や、紹介された資料などを基に、関心を持って話を聞けたか。(関心・意欲・態度)
展開 1	・現地の写真を基に、日本語とベトナム語の違いについて比較させ	・日本語と、ベトナム語で書かれたものを見て、使用されている文字を確認する。	全体	・現在使用する文字は異なるが、共に中国の影響を受けて発展してきたという共通点を説明する。	・両者を比較し、その特徴に気づくことができたか。(読むこと)

JICA 教師海外研修 授業実践報告書

	る。【4】 ・日本語表記について、生徒に話し合わせる。【2】	・「平家物語」の冒頭を、和漢混交文、ひらがなのみ、ローマ字の3種類で読み、その印象についてグループで話し合う。	グループ	・日本語の表記の特徴を実感させるよう配慮する。	・日本語の特徴について話し合い、自分の考えをまとめることができたか。(話すこと・聞くこと)
	・ベトナムの学校での授業風景写真、用いられている教科書を提示する。【4】	・ベトナムの中学校、高校の国語の授業について知る。	全体	・古典は高1から行うが、漢文そのものを読むのではなく、アルファベット表記(クオックグー)で読んでいることを説明する。	・ベトナムと日本の古典教育を比較し、特徴や違いについて理解できたか。(関心・意欲・態度)(知識・理解)
	・ベトナムの古典教育を紹介し、日本と比較させる。【1】【3】【6】	・ベトナム語の表記が今日のものに至った理由を知る。日本語の持つ歴史と比較し、両者の違いについて理解を深める。	全体	・日本語も、同じ歴史をたどった可能性があることに気付かせる。	・ベトナムの歴史とベトナム語の関連について理解できたか。(知識・理解)
まとめ 1	・もし日本にも文字がなかったら、どのようなことが起こるか考えさせる。【1】	・文字が受け継がれないことによって、どのような問題が起こるかについてグループで話し合い、考察した結果をワークシートに記入する。	グループ 個人	・ベトナムに限らず、日本でも起こりうることに、考えを巡らせるよう促す。	・問題について、グループで積極的に発言、また相手の意見を聞くことができたか。(話すこと・聞くこと) ・グループでの話し合いを基に、自らの意見を書くことができたか。(書くこと)

② 11月28日(月) 実施

展 開 2	・ベトナムの文学作品を紹介する。【4】	・ベトナムの国民的文学である「金雲翹」を取り上げ、その教育と人々の生活とのかかわりについて理解を深める。	全体	・地名や建物の名称、名付けにも関係していることを、具体例を挙げて説明する。「伊勢物語」を紹介し、日本も同様であることを伝える。	・ベトナムには人々の生活に根付く文学作品があること、日本にも同様のものが存在することを理解できたか。(知識・理解)
	・日本の高校生が古典を学ぶ意義について意見を出さ	・ベトナムの高校の先生へのインタビュー動画を通じて、高校生が古典を学ぶ意義について考える。	全体 グループ 個人	・ここまでの学習を振り返り、古典を学ぶ意義についてプリントに記入させる。	・ベトナムと日本の比較を踏まえ、古典を学ぶ意義について考えを深められたか。(知

	せる。【3】【6】 ・ベトナムでの文化保全活動を紹介する。【4】	・FIDRによるベトナムの伝統文化保全活動について知る。	全体	・文化を残すために、現地の人と、外部の人(日本人)が協力している現状を伝える。	識・理解)
まとめ 2	・古典を学ぶことが文化保全につながることを伝え、その一環として古典作品の書写を実施する。【1】【5】	・自分たちの身の回りで、文化の継承や保全につながりそうなものの例を挙げ、高校生の立場でできる活動について考える。	全体 個人	・国レベルの大きなものから、個人で行うことのできるものまで、自由に出させる。 ・文化継承の一例として書道を取り上げ、次回への導入にする。	・文化の保全や継承について、自分の立場で考えを持ち、書くことができたか。(知識・理解)(書くこと) ・ベトナムの事例を知った後で、自らの身の回りのことについて考えられたか。(関心・意欲・態度)



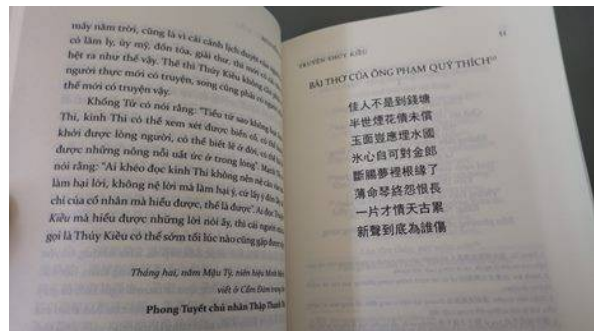
ベトナム語表記と漢字の砂絵



ベトナムでの国語の授業風景



日越の「金雲翹」

ベトナム語版「金雲翹」。漢詩の部分に漢字。
近年では、漢字表記も用いられるように。

(2) 授業の振り返り

今回の授業は「古典で国際理解教育を行いたい」「古典を学ぶ意義を考えてみたい」というところから出発したが、生徒にとって古典の授業と国際理解教育は結びつくのか、ということが常に不安としてあった。研修への参加が決まる以前から、現代文分野の授業にて日本と諸外国の比較を意識的に行っていたこともあり、大きな混乱もなく授業を進めることができた。コミュニケーションを取ることを好むクラスの雰囲気にも助けられ、「今まで当たり前のように思っていたことも、周り比べると違いが見えてくる」という話が様々な場面で聞けた。授業後、教員間の意見交換では、現地に赴いたからこそ得られた素材を、ICTを活用することで生徒に効果的に提示できたこと、生徒間の積極的なコミュニケーションが見られたこと、今回の授業は「人はなぜ学ぶのか」という国語だけにとどまらない、人間の普遍的な問いへのアプローチであったということが、良い点として挙げられた。

授業を行う中で、古典教育の話と言語の話が明確に分けられておらず、授業を行った私自身が混乱してしまう場面があった。また、今回用いた素材は、あくまで私が得た一部の情報に過ぎない。具体的には、「ベトナムの高校生も古典が苦手。でも、自分たちの歴史を知ることが大切だし、楽しい」というインタビューの言葉があっても、なぜ苦手なのか、古典教育の必要性について子どもたちがどのように考えているかについて、今回の素材だけで言及することはできなかった。そんな限られた中でも、生徒たちは様々なことを考え、ワークシートに書いてくれたが、それを授業時間内で発表させ、フィードバックを行うまでにたどり着けなかったことが反省点として残った。「なぜ古典を学ぶのか」という問いについて、これから出会う様々な人・ことから得たものを蓄積しながら、今後も生徒達と考えていきたいと思う。

(3) 使用教材

- ・パワーポイントで作成した「日本とベトナムの古典教育」スライド、写真(街の風景、食事、住居、学校の授業風景など)、FIDR の資料
- ・ベトナムで購入した本(ベトナムの国語教科書、日本語学習用の教科書、ベトナム語版「金雲翹」)

(4) 参考資料等

- ・『漢字圏の近代—ことばと国家』村田雄二郎／C・ラマール(編) 東大出版会 2005 年
- ・『金雲翹』阮攸 講談社 1975 年
- ・『世界の文字の書き方・書道 3 漢字文化圏の色々な書道』稲葉茂勝 彩流社 2015 年
- ・『地球の歩き方 ベトナム 2017』ダイヤモンド社 2017 年
- ・『東南アジア文学への招待』宇戸清治／川口健一 段々社 2001 年
- ・FIDR(公益財団法人 国際開発救援財団)ホームページ「国際協力援助事業 ベトナム」
http://www.fidr.or.jp/activity/cooperation_vietnam.html (2018 年 1 月 8 日 現在)

8 単元を通じた児童生徒の反応/変化

- ①ベトナムの古典教育について・・・ベトナムが、日本と同じく漢字を使っていたとは知らなかった。／自分たちの昔の文章がないのは残念だと思った。
 - ②文字がないと思うと思うか？・・・正確に伝えることができないのは困ると思う。／昔の人の経験から学ぶことも多いので、それが伝わらないのはもったいない。／日本は文字があるのが当たり前なので、なくなるなんて考えられない。
 - ③これからの日本の古典教育について・・・日本の教育が当たり前じゃないことに驚いた。／そのままでの文字で読めるのはすごいので、残ると良い。／意味だけ分かればいいので、古典の授業はなくなっていくと思う。困らないと思う。
 - ④感想・・・古典を訳だけで読むのはつまらない。音楽や美術と同じで、そのものの良さがあると思う。／ベトナムの人がどんな授業を受けてるかなんて、考えたこともなかった。いろんな国に行ってみたい。
- 年度当初に、「なぜ古典を学ぶ必要があるか」という問いをしたとき、生徒たちは「先人の知恵から学ぶため」という解答をしていた。古典を学ぶことに一定の意義を見出しつつも、文法の難しさなどから勉強に苦しむ生徒も多い。授業を通して、自らの古典を学ぶ姿勢について振り返っていたようだった。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

研修への応募の時は、「ベトナムでも古典教育が行われているだろうから、その現場を見てきたい」と考えていたのだが、調べていくうちに日本とはかなり状況が異なることが分かってきた。文献調査でベトナムには古典作品が存在しないこと、それでも古くから人々に親しまれる作品があることを知った。現地の研修では、文化保全の面で JICA や FIDR といった日本の団体が関わっていることが分かり、それらを軸として授業計画を行うことにした。私自身は、ベトナムに対して発展途上の国であるというイメージを持っていたが、実際には急速なスピードで発展を遂げており、ベトナムで働く人々のパワフルさからは日本の高校生が学ぶべき要素があるのではないかと感じた。そのことから、日本にとってベトナムは支援すべき存在としてだけではなく、国際社会において共に協力していく存在として語るよう留意した。

授業を通じて生徒たちは、比較を通して自分たちの特徴が見えてくること、当たり前だと思っていることは、実は当たり前ではないこと、ごく身近なところにも、自国の文化を担う術が存在することを理解していった。一方で、国語教育と国際理解教育が有する目的のずれに捉われたこと、生徒への質問設定の甘さ、フィードバックの欠如が課題として残った。今後は国語の教員として、自分が扱う教材を国際理解教育という視点で捉え直し、継続的に指導を行えるよう授業を計画していきたい。

10 教師海外研修に参加して

JICA 教師海外研修 授業実践報告書

教育の役割は「子どもの成長に資すること」であり、国際理解教育で言えば「国際社会で活躍する人材を育成すること」であると私は考える。学校という、ある意味で社会とは断絶した空間の中で、国際理解を促進する授業を行うためには、実践者である教師が現地へ赴き、自分の目で見て考えたものを、自らの言葉で語るより他にない。私は国語の教師であり、自分で考えた範疇でしか語れない。しかし、この研修を通じて出会った先生方や JICA の方々、授業実践を見に来て下さった先生方と話すことによって、教科も校種も地域も越えて自分の考えを広げていくことが可能となった。この広がった世界の中で生徒たちが学び、今度は生徒自身がいろいろな世界に目を向けてくれることが、本研修で得られる一番の成果であり、そのために今後も研鑽を続けようと思う。